『現代の世界経済』のこと

中山　弘正

今日は「米国の対イラク先制攻撃に反対します。日本のイラク攻撃加担に反対します」という「社会科学者は訴える」という意見広告（『朝日新聞』2.27.予定とのこと）に賛同の意志表示をしたところである。この原稿が活字になるよりも早いだろうが、アメリカの好戦的姿勢から見ると広告じたいも事態に追い越されるかもしれない。

時を与えられた今年度の私の主な仕事は『現代の世界経済』の執筆であった。実際ひたすら書いていたのは、02年4月～8月であるが、6月の上海と9月のロシア・ドイツ・チェコの旅はこの小さい作品の役にも立った。実はこの本のことは経済学部の紀要『経済研究』第126号（03年3月）にも「ノート」を書いているのであるが、とにかく、私としては、ロシア・ソ連からとび出して「世界経済」そのものを自著のタイトルにするのは全く初めてなので、大冒険なのであった（共著はあるが単著は初めて）。それで、こんなところにもその興奮をぶちまけてご声援を乞うという次第なのである（岩波書店、03年4月末刊行予定、3800円）。「ノート」の段階では書店名も定価も出していないし、そこでは「地球帝国アメリカの興亡」というサブタイトルを考えていると書いた。しかし、結果的にはサブタイトルは全く無しとした。たしかに「亡」は今の段階ではまだ言えない。近未来のことである。しかし、イラクに先制攻撃を加えたならば、「亡」のはじまりになろう。昨今のロシアの新聞『イズヴェスチヤ』に、イラク副首相が「アメリカのイラク戦争は、スターリングラードになろう」（ナチスの敗北の開始になぞらえている）と述べているが、アラブ諸国の動きがどうなっていくか、何が起こるかわからない。一時的に軍事的勝利があったとしても、チャルマーズ・ジョンソン『アメリカ帝国への報復』（集英社、訳2000年6月、「9.11.」のような出来事も予言したもの）の述べる対米報復は強まる一方であろう。経済ではいつものように、当面、戦争景気でアメリカの失業者は減り、軍需産業が活気づくとしても、国家財政の赤字は一層増え、貿易赤字は増えて、1990年代の日本のような長期大型の不況が、「亡」国のはじまりを告げることになるのではなかろうか。グローバリズムと市場原理主義ではもうこの国の「過剰富裕」と巨大な格差を正すことはできない…。

といった思いを込めて、ファンダメンタル（原理主義）なキリスト教の悪しき自己義認に陥っている地球帝国アメリカを見据えて分析したものである。冒頭に聖句「剣をとる者は剣で滅びる」（マタイ第26章）を掲げた。

むろん、アメリカは一つの焦点であるが、「世界経済」はアジアもヨーロッパも途上諸国も含めて成立しており、旧ソ連・東欧など「市場移行」地域も含んでいる。アメリカ帝国が滅びても「世界経済」はしばらくは残るであろう。ちょうど経済学科で「世界経済」というコースを立ち上げた（02年度から）ので、本書は私なりのそのことへの問題提起的なかかわりの表現でもあるつもりなのである。EUのところでは、根底にキリスト教があることが強調されている。最後は、ヨハネ黙示録（第8章）の「第七の封印」の引用で締めくくっている。地球帝国アメリカが亡びて、その後の「世界経済」に与えられるわずかの「時」を指し示したつもりなのである。聖句に始まり聖句に終わる、そんな『現代の世界経済』とともに歩んだ年度だったのである。諸兄姉に感謝しつつ。

（AD2003.2.11.）

（なかやま　ひろまさ　所員・経済学部教授）